第六十一回 静岡県保育研究大会

令和四年一月二十八日(金)　沼津市

令和三年度大会は異例づくしとなったので、まずは開催形式を箇条書きで記します。

① 前年度、本大会は、新型コロナウイルス感染症蔓延の影響により中止となったため、二年度ぶりの開催となりました。

② 東京オリンピックの影響により、開催時期が、従来の五月から一月に変更となりました。

③ 新型コロナの感染拡大の可能性を睨み、代替手段としてリモート開催も視野に入れて準備を進めてきましたが、年明け頃から感染が拡大し、集合研修が難しい状況となりました。

そのため、今回の研究大会は、助言者・議長・発表者等は、本来の会場であるプラサヴェルデに集合して発表等を行い、参加者は画面越しに視聴する形で開催されました（事前に作成した発表動画を流す発表者もありました）。

④ 例年、午後のプログラムは参加者からの質疑応答をもとに会場内で議論が交わされましたが、参加人数や通信環境を考慮すると討論は難しいと思われました。そのため、各分科会とも、発表及び助言者による講評のみ行いました。これにより、午前に、第一、三、四、八分科会、午後に、第二、五、六、七分科会という形で、四会場のみ使用して、計八分科会が行われました。

本大会は、「すべての人が子どもと子育てに関わりをもつ社会の実現をめざして」という主題のもと開催されました。

このテーマは以前から引き継がれてきましたが、その時代背景は、この二年余で急展開されたものでした。

すなわち、日本のみならず世界中が新型コロナウイルス感染症という危機に晒される中、保育所や認定こども園等の大切さが再認識されました。一方、新型コロナへの対応のため、保育現場全体が、これほど困惑したことはなかったでしょう。また、様々な感染症対策が、子どもの育ちを阻害しているのではと懸念する声も聞こえてきています。

こうした中にあっても、保育関係者が自らの使命と役割を自覚し、保育の社会的意義と役割、新しい生活様式の中での保育実践などについて議論を深めるために、リモート形式による研究大会という新機軸を試みました。機器の不具合等も一部ありましたが、スタッフがこの二年間で培ってきたリモート研修の技術や当意即妙な運営の上に、例年と変わらない熱のこもった発表が展開され、今後の保育の質と専門性の向上を目指すという大会趣旨を共有できたと思います。

初めての試みではありましたが、本大会は成功裏に終えることができたと評価できると思います。これも、多忙な中、惜しみないご助力を頂いた関係各位のおかげであることと深く感謝申し上げます。

第一分科会

テーマ【新たな時代の保育実践
～すべてのこどもにむけて～】

発表者 ①富士市立浅間保育園
保育士 勝呂 良太
②島田市 認定こども園
エルフのゆめ
副主幹保育教諭 山﨑早恵美
③浜松市 どんぐり保育園
保育士 長谷川純子

議 長 静岡市立丸子こども園
園 長 新貝 慶子

助言者 静岡産業大学部
教 授 漁田 俊子

記録者 三島市 恵明キッズ
フヨウビレッジ
園 長 杉村 太輔

発表㈠ 子どもの気づきやつぶやきから、心を動かす遊びの展開

富士市の公立保育園・認定こども園で行われている、地域別公開保育を軸に、遊びから学びへと結び付けられる保育の実践がどのように行われているのかを市内公立園全体で検証をした。アンケートから得られた課題から保育者の子どもの姿を深く読み取る力をつけることを目的として保育の実践記録を書くことに着目した。その記録を考察することにより、子どもの姿が明確化、見えるようになり保育者の保育の手立てを考える意欲が生まれ、そして子どもの遊びを展開していく意欲・主体性につながるようになった。

発表㈡ 実践を振り返り子どもの育ちを語り合える風土作り～ＫＪ法の活用は職員の相互理解にどのような効果をもたらすのか～

園内研修におけるＫＪ法の活用は、考えの整理や発言の充実等に効果的であった。一方デメリットとして、語り合いの困難さを助長することが考えられた。園内研修ではそれらを生かして進めることが重要である。デメリットについては、ファシリテーターの介入が語り合いに様々な良い影響を齎すことや、アイスブレイクの緊張緩和等の効果により解消されるのではないかと考えた。

「ただ仲の良い職員集団」ではなく、組織の中でルールを守り、プロ意識を持った上で考えることを前提とし、互いに語り合える職員集団を目指すことが求められる。

発表㈢ 子どもの絵を聴く保育～子どもが思いを伝え合う土台作り

どんぐり保育園では、「生きる力を育む保育」を保育理念の一つに掲げている。生きる力は他者への発信力が必要と考え、こどもが保育者へ安心して発信できるよう丁寧に保育を行っている。発信手段の一つである言語の発達過程にある子どもたちに対して、子どもの絵の中身を聴くことで、その子の感動を知る手掛かりを探った。子どもの思いの詰まった表現である絵を**聴く**ことにより、子どもの自分の思いや感動を発信する意欲を高め、さらには、言葉、文字を覚えていくことの一助にもなりうると考えた。

助言者より

エピソード記録を取る上で重要なことは、背景・エピソード・考察の三つを必ずそして分けて書くことである。ドキュメンテーションについては保育の質を高めるという側面と、保護者対応に使えるという側面があり、園によってどちらの側面を利用するのかを予め決めておくとよい。

ＫＪ法についてファシリテーターの育成は静岡県教育委員会が力を入れて取り組んでおり、家庭教育の分野から「つながるシート」を作成しているため参考にするとよい。

絵を聴くという保育者が得意なものを保育に生かしていく様子の報告から、子どもだけではなく、保育者も共に育つ、共育の様子も交えた発表であった。声掛けによって子どもが育つ、遊びが展開する、保育の本質に触れていたと思う。

第二分科会

テーマ【配慮を必要とする子どもや家庭への支援に向けて】

発表者　①伊東市　伊豆栄光荻保育園　副主任　高橋　朋美
②静岡市　あゆみ第二こども園　保育教諭　林　真人
③御前崎市立さくらこども園　副園長　髙塚　尚子

議　長　袋井市　ルンビニあゆみ園　園　長　野中　徹

助言者　静岡大学教育学部　教　授　香野　毅

記録者　沼津市立戸田こども園　園　長　朝香美智代

発表㈠　保育士同士の連携とPHOTOを通してつなぐ保護者支援を目指して

職員間で子の理解と連携を深めるため、また、子の成長の喜びを保護者と共有することで保護者の養育力向上に繋がる支援に結びつけるため、AGE教育目標を導入し、PHOTOを用い、ポストイットで子の気持ちを示したエピソード記録等を作成した。その実践から、子の状況や思いなどを職員間で共有することができ、チームワークがさらに深まることにより保育に変化が生まれた。

また、それらの目標や記録は、保護者との話し合いでも活用し、保護者との繋がりが一層深まる効果のある取り組みとなった。

発表㈡　支援の仕組みづくりと保護者の思い

子の支援に対する担任の抱え込みや職員の対応のばらつきなどに着目し、園全体で支援していく仕組みづくりと、子に対する保護者と職員の認識について探究し、今後の家庭支援の道しるべとなる取り組みを行ってきた。

仕組みづくりでは、職員間で話し合いの場を持つことで、自身の保育の振り返りや多様な視点から支援策が検討でき、支援に深みがでて園の保育の質の向上に結びついた。

また、保護者、職員にアンケート調査を実施し、認識の違いを把握した上で、保護者コミュニケーションマニュアルを作成した。

双方とも、実践継続を課題としている。

発表㈢　計画的・組織的な支援について

子の個性を良さとして伸ばしていく保育、家庭とともに子の成長を喜び合える保育を目指し、その手立てとして、個別支援計画に基づき簡潔でわかりやすい個人記録の見直しを行った。子の良さに着目することで職員の視点が広がり、記録をとることで子により関心が向けられ理解が深まった。そして、集団で認められ必要とされ達成感を味わう経験が、子自身を変えていくということを、実践から改めて学ぶこともできた。

集団の中で、個の支援のあり方について評価し、次に生かす取り組みは、クラスの育ちや運営にも変化をもたらせた。

助言者より

写真やビデオを用いたエピソード記録は、映像から保育者自身の姿に気づきがある。このような取り組みは、これからのバリエーションに期待が出来る。保護者と保育者の認識の違いについては、園と家庭、環境が違えば表われは当然違うと捉えた方が良い。保育現場で「みんな一緒」は「美しいが苦しい」…同じ場で同じ素材は用いるが、同じゴールは求めないという形態もある。家庭支援については、相手の状況を理解し、相手に伝わることばに置き換えて伝えることができているかが大切である。研修として、個への対応が全体の質を高めることに結びついている取り組みは、実のあるものであったことを示している。

第三分科会

テーマ【保育者の資質向上を図る】

発表者 ①富士市 ひな保育園 園長 中川美智子
②焼津市 焼津南保育園 主任保育士 植野 ゆか
③掛川市 おおぶち保育園 主任保育士 田中 松美

議長 富士宮市 野中こども園 副園長 中村 章啓

助言者 常葉大学保育学部 教授 山本 睦

記録者 富士市 緑ヶ丘保育園 園長 内藤 朝日

発表㈠ 保育者の主体性と意欲を高める園内研修

保育者の資質向上の取り組みの一つとして園内研修があり、保育者が主体的に園内研修に取り組むことが出来るよう、研修のあり方やPDCAサイクルを意識しているひな保育園。保育士が保育を楽しむ気持ちを持つと、子ども達の学びは一層充実できる。子どもと共に学び続けるという保育士の姿勢を大切に、日々実践を積み重ねている。園内研修を通して職員間の交流が活発になり、なんでも話し合える雰囲気になった。その風土作りがある事で保育士が子どもの発達や思いをとらえる力を持つことに繋がっていると考える。

発表㈡ 実習指導から考える保育の質の向上

焼津南保育園では、「焼津市の子どもたちは、私たちの手で」を合言葉に、平成二十八年度から保育実習の受け入れをテーマに研究を行っている。養成校への指導マニュアルを整理していくことで、自分たちの保育をどう伝えていくことが求められているのかが明確になった。自分たちの保育を言語化し作成した指導マニュアルに従って実習受け入れをしてみると、実習生も私達と共に保育にあたる同僚だと気付かされた。お互いの気づきを交換し学び合い、今後も実践の中で見直しを進める取り組みを続けていきたい。

発表㈢ 園内組織と職場環境の改善から保育者の資質向上を図る

おおぶち保育園では、保育者が主体的に研修に取り組めるよう話し合いや語り合いの風土作りをすることで資質向上を図りたいと考えた。話し合いの風土作り、語り合いの風土作り、職場環境の改善を行うことで働く意欲を高め、職員間のコミュニケーションの活性化を行う事が出来た。職場環境の改善を行ったことで中堅職員がファシリテーターとしての資質を身につけつつあり、その他の職員は園内研修に主体的に取る組む姿や意見を発言する姿が多く見られるようになった。今後も話し合いを進めながら資質向上に繋がる取り組みを行っていきたい。

助言者より

子ども達に求められる学力が今は変わってきた。その変わった所に繋がる基本的な経験を、子ども達にどれだけ積ませてあげられるかが就学前の施設に求められてきている。

目の前にいる子ども達が、数年後に経験すると思われる様々な学習や求められる能力に対して、見通しを持って指導計画を立てられるかが保育の質の高さの一つだと考え、質を高める事を考えた時に保幼小連携が重要になり、連携を考えた上で計画を立て、それに求められる経験を積ませてあげられるよう保育者が対応すれば、保育の質も保育者の質も向上すると考えている。

第四分科会

テーマ【地域の子育て家庭への支援の充実にむけて】

発表者　①袋井市　ルンビニあゆみ園
　　主幹保育教諭　早川　陽子
　　②吉田町立わかば保育園
　　主任保育士　塚本　美樹

議　長　藤枝市　たちばな保育園
　　園　長　井原　佳明

助言者　静岡福祉大学こども学部
　　教　授　永田恵実子

記録者　藤枝市立前島保育園
　　園　長　河村　明子

発表㈠　コロナ禍でのハッピー子育て

「保護者に笑顔で子育てをしてもらい、子育てを通して子どもの成長に幸せを感じてほしい」との思いをもって日々保育をしているなか、コロナウイルス感染拡大により、子育て環境は以前と大きく変わってきた。コロナ禍における子育て環境の変化について保育園と地域の子育て支援センターを利用する保護者にアンケートを実施し、〝子育てを楽しむ〟支援を考えた。コロナ禍で子どもと向き合う時間が増えたからこそ見えた悩みや不安もあった。各年齢の発達の目安や、困った事への園での対応方法を示したり、家庭でできる年齢にあったあそびを紹介するおたよりを作成し、園だけでなく地域の子育て支援センターの利用者の家庭にも届くようにした。今後も、「ハッピー子育て」の援助ができるよう、相談・対話を大切にし、子ども達の年齢ごとの発達への理解を促していきたい。

発表㈡　保護者の気持ちを支え喜びを感じる子育てのために

公立四園では、子ども達が生き生きと遊び、成長していくとともに保護者が安心して子育てができる環境作りを心がけている「子育てが楽しい」と思えるように子ども達の姿を伝える方法や、相談しやすい雰囲気作り、保育の発信の仕方を考えた。在園家庭に向けた支援では、園内環境の充実を図り、親子で楽しむコーナー作り「イヤイヤ期」について簡単に面白くまとめたポスター掲示などをおこなった。家庭に向けた発信では、園解放についてアプリを活用したり、子育て支援センターや児童館と連携し保育園や子どもの様子を地域に発信した。コロナ禍での取り組みとして、ユーチューブの活用も行った。各園持ち回りで遊びの紹介や手作りおやつの紹介など、子育て家庭に向け、保育園を知ってもらえるツールにもなっている。発信することの重要性を感じ、職員の意識も高まってきている。今後も子育て家庭に寄り添いながら耳を傾け様々な形で支援を充実させていきたい。

助言者より

「子育てが楽しくなる」という事は簡単なことではなく、もともとの親の素質やそこにある環境も影響を与えているので、これらを考えて支援していかなくてはならない。年齢別の発達をわかりやすくまとめたものは、年齢別の指標にもなり、とても有効なものと言える。また、悩みに応えるという点も「保護者がみんな悩んでいるんだ」と自分だけでない事にほっと安心する材料になる。また、おもしろおかしく作成された「イヤイヤ期」のポスターも親の気持ちを安心させる。みんなが知りたいと思っていることが示されていくことで、次へとつながっていける。今回の発表では、情報の提供の仕方についてどうしたらよいかをいろいろと提示してくれた。ネットを使っての配信は、園に来ない親にも手が届き、支援センターとの連携では心配な親にも手が届くことになる。

第五分科会

テーマ【子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク】

発表者 ①裾野市 富岳キッズセンターあい 主任 杉山 愛子
②静岡市 だきしめこども園 園長 小林かおり
③浜松市 遊歩の丘はまなこども園 教頭 坪井 由香

議長 静岡市 一番町保育園 園長 海野美代子

助言者 常葉大学 准教授 中村 俊哉

記録者 三島市 梅の実保育園 園長 佐藤 悟郎

発表㈠ 気づく・はぐくむ・つなぐ

静岡県御殿場市に拠点を置く社会福祉法人富岳会。今回は裾野市にある三園が中心となって取り組んでいる関係機関との連携について発表が行われた。富岳会では幼児から高齢者、特別な支援が必要な方まで幅広い受け皿を用意されており、利用を希望する全ての方たちへ門戸を開いている。インクルーシブ保育を実践しており、個別に支援の必要な児童に対しても必要な連携機関と職員を法人内に備えており、各職員がそれぞれの分野において十分に能力が発揮できる職場環境が整えられている素晴らしい内容だった。

発表㈡ 新しい生活様式の中での新たなネットワークの築き方を考える

コロナウイルスの影響により様々な交流の機会が失われつつある昨今、だきしめこども園の先生たちは子どもの心を育むための出会いの場を様々な視点から見直し、積極的にアクションを起こしている。近隣小学校との接続や、地域高齢者とのふれあいの機会を確保するための考え方や実際の取り組みは高い関心を集めるもので、全ての地域で実践が可能な非常に素晴らしい発表内容であった。助言者の中村准教授からも、子どもたちの成長にとっても高齢者の方々にとっても有意義なものだと高い評価を得た。

発表㈢ 未来につなげたい子どもの深い学び

遊歩の丘はまなこども園では、子どもの育ちを具体的にとらえていくために、地域や小学校との接続に力を入れており、アンケートを取ることで問題点の把握と具体的な対応を実践している点が発表のポイントであった。特に多くの関心を集めた点として、十の姿についての内容をポートフォリオ形式でまとめ、それを小学校と共有することで小学校側から入園前の子どもたちの育ちの状況が把握しやすいように配慮された取り組みについては会場の全ての人が耳を傾けた。

助言者より

全ての発表者の各園が「子どもの為」に様々な取り組みを行っている点を高く評価した。保育者はただ子どもたちと接するだけではなく、保護者、学校、専門機関と様々なネットワークとつながりながら子どもの育ちを見守ることの重要性を再確認し、各園の取り組みについて聞き入っていた。コロナ禍においては中々思い通りに保育ができない場面が多くあるなかで試行錯誤を繰り返す先生たちを労い、各園の取り組みについて意見を交換し合うことで学びの意欲が高まる非常に良い分科会であったと総評を述べた。

第六分科会

テーマ【「食を営む力」の基礎を培う　食育の推進】

発表者　①清水町　しいの木保育園　主任保育士　関野　嘉子
②静岡市　みどりが丘こども園　副主幹保育教諭　杉村　邦子
③浜松市立三方原保育園　保育士　伊藤　恵子

議　長　袋井市　ルンビニこども園　園　長　岡田　泰稔

助言者　NPO法人こどもの森　理事長　吉田　隆子

記録者　御殿場市　すみれ保育園　園　長　鷹野　一広

発表㈠　「食を営む力」の基礎を培う食育の推進
～おもてなしの心を育てる～

「食」を真ん中に保育を進めれば【生き抜く力のある子】になる。幼児期の終わりまでに育ってほしい十の姿は「食」から学べると考える。生活の全てが食育であり、特別な活動ができない中でも他愛のない会話や当たり前にしている活動にも意味があることを、言葉に心を添えて丁寧に関わることが大切だと実感した。活動は割愛されたが、ゆっくり子を見る為には必然な事であり、これからこそ職域の壁を越え、お互いしっかり尊重し理解し合った中で、思いやりや感謝の言葉を伝え合いながら子ども達の成長を支えたい。

発表㈡　「食を営む力」の基礎を培う食育の推進
～食育実践について語り合おう「ねぇ、みんな聞いて！」～

食をテーマに「ねぇ、みんな聞いて！」と仲間に伝えたい子どもの姿を語り合う中で、皆で高め合う環境や風土作り、同僚性をもっと築いていけるように取り組んだ。栄養士や調理師の企画による食体験を通して安全でおいしい食を提供していきたいという思いや、保育士がもっと気持ちを楽に子ども達と一緒に食に興味や関心を深めていって欲しいという願いがあることを感じることが出来た。日々の保育に不安がある中だからこそ、子ども達と共に毎日に幸せを感じ、食から元気をもらい食育の大切さを感じている。

発表㈢　「食を営む力」の基礎を培う食育の推進
～地域の方と共に食を考える～知りたい！食べたい！やってみたい！

浜松市立全園で行っている食育だよりの発行やクッキング等を工夫し、より丁寧に行っていくことにより保育士の食育の意識が高まった。地域の特産物に目を向けることで子どもの興味が高まり、保護者との話題にも繋がることがわかった。地域の方との交流により「身近なものや出来事と関わる力」「人と関わる力」が伸びていき、食べることへの興味や関心が高まっていくことが成果として得られたのではないかと思う。

助言者より

三園の発表は基本的な事がきちんと捉えられていて、保育所保育指針・五領域・育ってほしい十の姿、それぞれに基づいた研究だった。「楽しく食べる」とは笑顔がある、つまり友達とおしゃべりしながら周りの人と関わっているからこそ「楽しい食卓」が成り立っている。今、第四次食育推進計画に来ていて、これは令和三年～七年の五か年の食育推進計画となる。重点項目は①生涯を通じた心身の健康を支える食育の推進、②持続可能な食を支える食育の推進の二点であり、特に②の「接続可能な」とはSDGs（十七の目標）が示され、これからはこの十七の目標を食育の中でどう取り組んでいくかを考えていく必要がある。

第七分科会

テーマ【保育の社会化に向けて
～保育の営みをいかに社会に発信するか～】

発表者　①小山町立するがおやまこども園
　　副園長　渡辺香代子
　　②磐田市　ひまわり保育園
　　副園長　山下　葉月

議　長　静岡市　有度十七夜山保育園
　　園　長　笠井　友泰

助言者　常葉大学短期大学部保育科
　　教　授　鈴木久美子

記録者　静岡市　城北保育園
　　園　長　松田　剛

発表(一)　保育の社会化に向けて ～保育の営みをいかに社会に発信するか～子どもの育ちを伝えて喜びを共有しよう

子どもたちの学びを伝える、子育てへの関心、地域に向けて、という三つの柱に基づき、子どもたちの育ちを見える化し、保護者、地域、小中学校に子どもの姿や遊びを発信していく。

園内で起きた出来事を保護者と共有していくため、園だよりやクラスだよりは写真などをたくさん使うようにしたり、子どもたちが園での出来事を家庭で伝えやすくするため、ドキュメンテーションを活用したりして、わかりやすく伝わるような工夫をした。

また、平成二十二年から小山町内の公立園で始めた子育て通信は、町内の施設で配布され、今まで同じ悩みを持つ保護者にとって安心できる情報を提供することができている。

これからは、時代の変化とともに、保護者がどのような情報が必要か、また、その情報を発信する媒体を工夫していきたい。コロナ禍の中、人との接触を行えない現状ではあるが、保育の営みを止めず、子どもたちの育ちを発信することは保育者の大きな役割であり、保育の発信をもとに、地域に根付いた園づくりが必要である。

発表(二)　地域社会への発信の試みと、保護者への発信方法の改善

地域への情報発信の試みとして、紙面のお便りを不定期で発行していたが、アンケートの結果、子育て世代以外には、あまり重要性を感じてもらえず、読んでもらえていなかった。そこで、内容や発信方法について考え、多くの人に見てもらえるよう、園のホームページをリニューアルし、その中に子どもたちが地域の中で触れ合う様子を伝えるページを設けた。また、インスタグラム、ツイッターなどを活用し、写真や動画で紹介することにより、見やすく楽しんでもらえるようになった。

保護者への発信方法の改善には、ホームページを活用し、ブログをリニューアルしたり、日々のドキュメンテーションの配信をしたり、園からの配布物が閲覧できるなどの改善を行った。保護者からは、写真や動画は非常にわかりやすく見やすくなった一方で、個人情報の管理や、手書きの連絡帳が減ったことへの不満が出てしまった。これからも保護者や地域の方の意見と聞きながら保育の営みを発信していきたい。

助言者より

とても刺激的な内容でした、年々本分科会の内容が非常に濃くなっていると感じる。保育の伝え方について当初は悩んでいたが、今ではドキュメンテーションの活用、ＳＮＳの利用、ホームページの充実など、伝える発信が日常業務の中で行われ、発信力を高めている。しかし、伝えることが主になってしまっていないか、伝えることの本質を忘れないで、保育のすばらしさを伝えてほしい。また、日々の業務に追われる中、現場で働く職員の負担も考えてもらいたい。伝えることが、見せることにならないよう、振り返りや検証をしていくことで保育の質を高めてもらいたい。

コロナ禍の中で取り扱う分科会としてとても有意義な分科会でした。

第八分科会

テーマ【公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割】

発表者 ①沼津市立大平保育所 所長 佐藤 智子
②静岡市立用宗こども園 園長 青山 倫子
③浜松市立可美保育園 園長 森川 好美

議長 湖西市立鷲津保育園 園長 大久保加奈子

助言者 静岡英和学院大学 非常勤講師 徳浪 芳江

記録者 湖西市立新居幼稚園 教頭 鈴木真由美

発表㈠ 地域社会に根差していくために 公立保育所がめざしていくもの

「いきいき暮らせるまち」を基に子育て支援、地域支援に取り組んだ。子ども・子育て支援事業計画と保育体制から公立保育所の使命を考え、保育所と地域とのつながりを大切にし、「幼児期の終わりまでに育ってほしい十の姿」を意識しながら地域の中でできることを行った。直接触れ合う交流はできなくても連絡を取り合い情報の共有をしてきた。

ＳＤＧｓを念頭に置き、行政や地域と情報を共有し協力し合い、子どもたちの明るい未来のために地域に根差す保育所をめざしていきたい。

発表㈡ 地域共生社会実現に向けた公立こども園の役割と関連機関との連携及び協働

地域住民が住み慣れた場所で支え合っていくことのできる共生社会に向けて、住民及び関係機関との連携・協働し園の特色や地域性を生かした活動に取り組んだ。長田子育て支援協議会、高齢者との交流、地域社会における子育て支援を通して地域の良さを知り、人とのつながりを大切にしてきたことで、子どもを地域で育てるという風通しの良い関係ができた。

様々な関係機関と連携を図り、情報共有することで地域の方々が安心して生活できるよう、また、子ども達が地域社会の方々に見守られ愛される存在となることを目指していきたい。

発表㈢ 異言語家庭の子どもの保育と家庭支援

「多文化共生」を踏まえ、異言語家庭の子どもとその保護者に対して、何ができるか考え、家庭理解に努めた。掲示の工夫、多言語通訳用タブレット端末の利用、浜松国際交流協会への研修参加を通してコミュニケーションを密にし、信頼関係を築きながら、保護者や子どもの気持ちに寄り添ってきた。

公立園の強みでもある行政との連携を大切にし保育をリードする立場でありたい。これらは、異言語家庭に限らず、すべての子どもや保護者に関わる場面で共通する。保育士の意識を高め、保育の質の向上につなげていきたい。

助言者より

私たちは安全管理、感染症対策、防犯の徹底など様々なことをきっちりとやる義務がある。その中で地域を生かし、子ども達にいろいろな経験をさせていくことが大事である。地域とつながっていくことで双方に良いことがあり、人と人との触れ合いの中で思いやりをもって接することが大切である。保育の質にこだわって何が育っているのか、地域や保護者にしっかりと伝えていく。

悩みや課題は園長会で共有し合ってつながっていくことで保育の質が上がり、また一歩先につながっていく。公立園としてリードし責任を持ち、保育の質を高めていくとよい。

県保育研究大会に参加して

第一分科会

各園の発表を聞かせていただき、三園とも子ども一人ひとりの発達や生活、園児を取り巻く環境を真剣に見つめ、日々の保育が実践されていることを強く感じました。そして、その取り組みが保育者個人だけでなく、園として行動し、保育者としての専門性を高めているということに感銘を受けました。

最近では時代の流れや変化が速いですが、時代が変わっても子どもたちの育ちに大切なことは変わらないということを改めて感じさせていただける発表だったと感じ、これからも大切にしていきたいと感じました。今回の研修で学ばせていただいたこと、感じたことを自園に持ち帰り、今後の保育実践に活かしていきたいと思います。

袋井ハローこども園　鈴木　康

第二分科会

「配慮を必要とする子どもや家庭への支援」というテーマで各園の研究発表がありました。

〝配慮の必要な子ども〟と一言で表現しますが、実際は、その表れは多岐にわたり一人ひとり異なり、援助の方法も一通りではありません。そのためにどの園でも対応に苦慮しているところだと思います。今回の発表では、子どもを援助し、保護者を援助していくために園全体でどのように取りくむかを研究し、取り組んできた様子が発表されていました。

対象児童が気持ちよく園での生活を送るために園全体が協力をしてその子の情報を共有し、また家庭との連携を深める努力をしている様子がまとめられていました。実際に、配慮が必要な児童がお部屋に一人でもいる場合に担当の職員だけがその対応に悩み苦しむことがありがちと聞きます。対象児童に対してどのような支援が必要で、どのように対応していくのか、それは誰が動くのかを園全体で受け止め、対応を考えていくために、発表園それぞれの考え方で取り組まれていると感じました。視線を向ける方向で取り組み方が変わってくることも感じました。

配慮を必要とする子どもへの対応を考えることでそれ以外の子どもたちへの保育に対しても対応が変わってくることがあるかもしれない…。と保育への視野の広がりにつながる研究でもあるのではないかと感じました。

上池さくらこども園　増谷　昌子

第三分科会

「保育者の資質向上を目指す」というテーマの発表を聞き、実習生受け入れが、保育者の保育・人間性を客観的に捉える場となり、学生が質の高い保育、保育者に触れる事で保育者養成にもつながるという相互のメリットがある事。また、「園内研修」の発表では共感できる事が多く、園全体の働きやすい環境と保育者自身が心から「楽しい」と思える、主体的な毎日こそが子ども達の為に重要であることを再確認できました。保育者が様々な経験・本物に触れ個々の感性・スキルを上げ、職員間で足並みを揃えて保育していく為により良い職場環境づくりを目指したいと感じました。

足久保こども園　鈴木　理恵

第四分科会

「地域の子育て家庭への支援の充実に向けて」をテーマとして、保護者の気持ちを支え、喜びを感じる子育てのための取り組みや、コロナ禍での新たな発信の取り組みが発表されました。新型コロナウイル感染拡大により、感染予防とは言え今まで行われていた触れ合いを通しての支援がためらわれる状況の中でも密を避けて楽しめる工夫や、情報の提供など子育て家庭に寄り添いながら取り組まれた実践は、どれも子育て家庭の力になりたいと

いう思いが強く感じられました。自園でもできるところから取り入れていくと共に、地域の子育て施設と協力関係を整える努力をしていくことでより良い環境となれるよう働きかけていきたいと思います。

麻機保育園　澤田　央規

第五分科会

『子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク』をテーマに三つの園の発表を聞きました。コーディネーターの役割を持った職員が中心となって、どのように相談や提案、連携をとっていくかコーディネートしていき、就学につなげている『行政との連携、法人内施設との連携』、一年生のカリキュラムに幼児との交流を取り入れた『保幼小の連携活動』、高齢者施設との交流を実施している『遊びの会』保護者の声を大切にし、また、地域との交流活動を大切にした取り組みなど地域の特性を生かした連携の話を聞きコロナ禍でもできることを知り自分の園での取り組みのきっかけになりました。子どもの育ちには地域や関係機関との連携がとても大切だと改めて感じました。

ひよこ保育園　村越　秀子

第六分科会

「食を営む力」の基礎を培う食育の推進をテーマに発表がありました。コロナ禍でリスクや制限のある中でも、三園それぞれが歩みを止めることなく、おもてなしや職員間の語り合い、地域の特産物を生かすなど、豊かな視点で多岐にわたる活動を展開していました。食育といってもクッキングや栽培だけでなく、様々なアプローチの方法があることを目の当たりにし、食育の深さや可能性を改めて感じることができました。

園職員が持つ想像力。自園の持つ資源を広い視野で見て、自分たちに今何ができるのか。子ども、職員、保護者、地域と協同しながら、SDGsを意識した新たな時代の食育を考えていきたいと強く思いました。

竜南こども園　太田嶋俊彦

第七分科会

「保育の営みの発信」をテーマに、どちらの園も、子どもたちの学びを伝える発信、今の時代に合った子育て情報等、保護者へ向けての発信、地域に向けての発信と、それぞれに合わせた内容を考え発信をしていること、そして、写真を使った紙媒体のみならず、SNSなども活用していることが印象的でした。

現在、コロナ禍のために、保育の営みを発信することは、より注目され、どの園でも行われてきています。様々な形式での発信が当り前になりつつある今、「保育の『見える化』が『見せる化』にならないように」と助言いただいたように、保育者が何の意図を持って発信するのか、改めて考えていかなければならないと感じました。

えじり保育園　井出孝太郎

第八分科会

公立園には、行政や専門機関と繋がり易いという利点があると同時にそれらの強みを役割として認識し、子育て支援の拠点として活躍されている各園の発表が印象的でした。地域との関わりや連携の強化が年間計画の行事や予定として組み込まれており、こども園を中心として日常的なものとして為されていることが発表から理解できました。

少子高齢化へと移行し続ける社会で孤立し易い子育て世帯や、コミュニケーションを取りにくい異言語家庭への支援への課題と取組を聴き、それぞれの家庭に園として何ができるのかについて参考になりました。また、日常的な保育の中で地域理解や関わりを増やしていき活動を広げていく必要性を感じました。

ほのぼの保育園　坂井　玄気